

# 鬼柳と逝くリリカルな世界

Φ &39;s

一本満足バーがないと、満足できない少年 古歌 ハク 《ふるか はく》はあ  
る日突然、些細なことで死んでしまう。彼が目覚めると、其処は一面の白い世界  
だった。その世界で彼は、ある人物と出会う。

# 目次

满足



## 満足

満足成分が多く含まれております。アレルギーの方、中毒の方は十分に注意、予防をしてください。

---

キンコンカーンコン

チャイムの鳴る音と同時に、古歌 拍《ふるか はく》は弁当箱を掲げて、

「ヒャーハハハハハハハハハ！でゅ→エル飯だァ！」

と言い、弁当箱を開けて 一本満足バーを食べ始めた。

それも大量にだ。クラスメートたちはハクの奇行を見て最初は戸惑っていたものの、次第に慣れていった。

「相変わらず一本満足バーには目がないな、ハク」

とハクの友人 宇瑠《うる》は笑いながら尋ねた。

「おう、一本満足バーは俺の命といってもいいからな。」

つられて笑って答えるハク……いつもと変わらない日常……そう思っていた。

その時

ハクの体に異変が起きた。

「うぐっ!？」

突然小さな悲鳴を上げて、床にバタンと倒れた。

「おいっ!？大丈夫か？」

---

「此処はどこだ？」

ハクが目を覚ましたのは、何もない真っ白な空間だった。

「いやー待たせたね！」

ドン☆

何処からか声が聞こえる。

「僕の名前は神っていうんだ！よろしくね。」

「神って…あの神?! アイエエエエエエエエエエ!!! ナンデ?! 神様ナンデ!!」

「まあまあ落ち着いて、とりあえず君、今の状況…分かる？」



ハクは今の状況が理解出来なかった、

何で、俺はここにいるのか？

何で、俺は神様に会っているのか？

そんな疑問を神様は一言で解決してくれた。

「異世界転生、してもらおうから。」

ハクはこの状況を全て把握した。

「え、俺死んだの？何で？」

「一本満足バーを喉に詰まらせて……」

「」

ハクは絶句した、まさか自分が愛している一本満足バーに殺されるとは思って  
いなかった

「それでさ、お願いがあるんだけど……君が今から行く世界には、呪われた亡霊がいるんだ」

「亡霊？」

「そう、その亡霊を見つけてこの世界から解放して欲しい」

決闘「デュエル」で!!」

.....

「頭の中大丈夫ですか」

本当に遊☆戯☆王で世界が救われるのか？

「本当なんだ！信じてくれ！」

「第一、亡霊って何ですか！」

「ええっと……それは………」

どもる神様は、思い出したように

「ああ！そうだ！亡霊には亡霊でデュエルしなければいけないんだった！」

「あの！話W「じゃあ君にこの亡霊を憑依させるね！」聞いて「エイヤ！」ああああああああああ！！！！！」

ま、間に合わなかったアアアア！！

「いやー君が生前、一本満足バーが狂うように好きだっていう情報を掴んだから、君にはこの亡霊しかない！ って思ってたね。これで満足してくれよ」

「ま、まさか………！！！！！」

T T T T T T T T T T T T  
 T T T T T T T T T T T T

『ほう、お前がハクか？ 神様から話は聞いている、同じ〔満足〕どうし仲良くしようぜ！ 俺を……満足させてくれよ？』

そう、ハクに話しかけたのは、

かのサテライトを征服し、

元ダークシグナーで、

満足タウンの町長、

そして——伝説のサテイスファクションのリーダー

鬼柳京介がそこにいた。

「満足さん……だと? ……って亡霊?!」

『ああ、俺も亡霊として世界をさまよっていた。奴らは全て腕利きの決闘者だ、まあその中に「リアリスト」もいたが、奴は速攻で片付けた。』

亡霊が全て腕利きの決闘者だとしたら…

「じゃあ何で満足『満足さんはやめろ』…鬼柳さんは、俺の所に?」



『…そうだな、お前に会う前の俺は、生ける屍…もとい、死神の様な奴だった』

淡々と鬼柳が話す

『何をするにも満たされず、残ったのは…仲間達を傷つけてしまった罪悪感と、俺の持っている命よりも大切なデッキ、それだけだった…』

『その時の俺は、罪の意識から…自分の死に場所を求めていた、それで満足するしかない…』

『だが、そこにお前が現れた』

ハクの目を見て話す鬼柳、そこには確固たる意志があった

『ある日、神様が俺の所に現れてな、

「君が望む物があるかもしれないよ。僕と一緒に来るかい？」

と言ったんだ。最初は信じられなかったんだが…俺が望む物、〔満足感〕を手に入れられるかもしれないと思って、ついに行っただ。

そこで神様にお前を紹介されてな、お前をしばらく見ていたんだよ。

まあお前を見て最初は変な奴だな……と思ったけどな。

だんだんお前を見ているうちに

お前の、「満足」をどこまでも追い求めるその姿が、俺にあの頃を思い出させたんだ……』

鬼柳はしみじみと語る

一方でハクは

（ただ一本満足バーを好きなだけ食べたただけなんだけど、しかも死んだし）

と本心話すことができなかった。

「まあ、これからよろしく、鬼柳さん」

『こちらこそよろしく、ハク』

二人は固く握手を交わした

一方で神様は

「そろそろ僕も喋りたい……」

と一人つぶやいていた

「それで神様、どの世界に行けばいいんだ？」

「やれやれ、やっと僕のターンだね！。

君たち二人に行ってもらおう世界は

魔法少女リリカルなのはだ！

さあ、ここで君たちの旅を見送ってくれるスペシャルゲストの登場だ！

カモン!!」



次回に続きます

---



# 鬼柳と逝くリリカルな世界

---

著者 Φ&39;s

発行日 2022 年 4 月 4 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-  
<https://syosetu.org/novel/17509/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。

---